

サウジ・ガス・イニシアティブとガスラウンドの背景に関する一考察¹⁾

A Research on Backgrounds of the Saudi Gas Initiative and the Gas Round

河 村 朗*

Akira KAWAMURA

抄 録

本稿の目的はサウジアラビアの天然ガス産業の開発に外資導入が計画され、実現した2つのプロジェクトーサウジ・ガス・イニシアティブとガスラウンドーの背景にある要因について考察することである。その際に重要なのは、1998年と2003年に注目することである。前者はアブドラ国王(当時皇太子)が外資導入政策への転換を表明した時期であり、後者はサウジ・ガス・イニシアティブが失敗したことを踏まえて、その後のガス・ラウンドが新たに企画されていった時期である。これらのそれぞれの時期を考察することによって、どのような状況が背景にあるのかを明らかにする。

1. はじめに

サウジアラビアは世界全体の約1/4の石油確認埋蔵量を有する国として知られている。この国の石油開発は、1930年代初頭にアメリカの国際石油資本の導入によって開始された。その後、増大する石油生産量やその輸出量はこの国を世界有数の石油大国へと押し上げた。

このような石油大国としての顔を持つサウジは、1980年、アメリカ系メジャー4社によって経営されてきた石油企業アラムコの実質的な国有化を断行した。その後、石油産業や天然ガス産業などエネルギー資源の上流部門を外資に開放してこなかった。しかし、1998年に、ファハド国王に代わって実質的な権限を持っているアブドラ国王(当時皇太子)のアメリカ訪問以降、天然ガス産業の上流部門に限定して外資を導入することで開発を進めようとする動きが出てきている。

エネルギー資源の上流部門に対する門戸を長い間閉ざして来たサウジ政府が、なぜ天然ガス上流部門を外資に開放する政策に転換したのであろうか。本稿の目的は、サウジ・ガス・イニシアティブとガスラウンドの両プロジェクトを通して、この国の天然ガス部門に外資を導入した背景について考察していくことである。

以下、第2節では、天然ガス産業の開発の歴史について説明する。そして、サウジにおいて天然ガスの開発が今日どの段階にあるのかについて議論する。次に第3節では、今日、外資開放政策に転じ

* 関西国際大学経営学部

た天然ガス産業にを開發するために企画されたサウジ・ガス・イニシアティブとガス・ラウンドの内容について説明しよう。続く第4節では、このような天然ガス産業への外資導入が20数年ぶりに計画され、また実現された背景について、1998年と2003年の2つの時期に焦点を当てて考察する。最後に終節で、結論をまとめる。

2. サウジにおける石油産業と天然ガス産業の開發の歴史

サウジの天然ガス開發のこれまでの歴史をふりかえる時に、石油産業を抜きにすることは出来ない。なぜならば、当初、天然ガスは石油と一緒に産出される随伴ガスであったからである。そこで、この節では、石油と天然ガスという2つのエネルギー資源を通じたサウジの經濟發展を歴史的に説明しよう。そして、また天然ガス開發がどのような経過を経て、現在どの段階にあるかを示そう²⁾。

この国のエネルギー資源開發は、1933年に、政府とアメリカの石油企業との間の石油利権交渉に関する合意に端を発している。サウジの石油生産量は1938年に初めて生産が始まったが、急増したのは戦後になってからである。石油生産量は1956年には初めて日量100万バーレルを超え、その後、2回の石油危機を経た1980年には日量で990万バーレルと最大の生産量を実現した³⁾。

このようにサウジで石油開發がスタートし、その後、生産量が增大していった1970年代前半までの天然ガスに対する政府の立場は、石油の付随物というもので、資源としての重要性が認識されていなかった。このため、随伴ガスは、油田の圧力維持のための再注入を除けば、ただ無駄に燃やされるだけであった。

1973年に発生した第一次石油危機の結果として、国際市場における石油価格は高騰した。また、石油生産量も増大した結果、石油収入は飛躍的に増大し、1981年には1133億ドル⁴⁾にも達した。それはサウジ經濟に好影響を及ぼし、インフラ整備、石油化学工業化の推進など国内の經濟開發の急速な進展を引き起こした。このような石油ブームの中、資源としての天然ガスの重要性が高まった。そして、政府は1975年、アラムコ(Arabian American Oil Company)に対して、今まで無駄に燃やされることの多かった随伴ガスの収集、加工、再利用のための「マスター・ガス・システム」⁵⁾の建設と操業を求めた。「マスター・ガス・システム」は、その後1981年に完成した⁶⁾。そして、このシステムを通じて輸送された随伴ガスは、需要が増大した石油化学工業化のエネルギー源として供給された。この時期が第1段階である。

1980年代中葉になると、石油価格は下落し、特に1986年には暴落した。また、サウジの石油生産量も前述した1980年の日量990万バーレルから、1985年には日量318万バーレル⁷⁾と5年間で急減した。このような状況は、随伴ガスの生産量の減少を伴った。ただ一方で、ガス需要は急増していったので、ガス生産と石油生産とをリンクさせない必要性に迫られていた。そして、その状況下で、「アラムコは1984年から1985年にかけてガワール油田のクフ層とアブカイク油田で発見された構造的ガス田の開發」⁸⁾を開始した。このように、1980年代中ごろに、石油生産の付随物ではない非随伴ガスの生産が始まり、その後、アラムコは国内の非随伴ガスの開發を進めた。このような動きは第2段階として位置づけられる。

しかし、1980年代中ごろからの逆石油危機による石油価格の下落は、財政赤字に結びついた。このため、1988年にアラムコが国有化され、サウジアラムコ (Saudi Arabian Oil Company) に社名変更されたとともに、その企業の垂直的統合を目指す政策が採用された⁹⁾。こうした動きの一方で、サウジ国内では、石油化学工業に加えて、電力、水などの公共事業においてガス需要が急増した¹⁰⁾。こうした状況へのためには、新たな天然ガス上流部門の開発によって非随伴ガスの生産量を増大させ、これと合わせて「マスター・ガス・システム」の拡大などが必要であった¹¹⁾。このような投資には膨大な資金を必要としたが、ただ、逆石油危機以降 1990 年台後半にいたるまで、1990 年を除いて原油価格が 1 バレル 10 ドル台であったことから、財政赤字が続いてきた政府には重荷であった。ここに、1998 におけるアブドラ皇太子 (現国王) のアメリカ訪問によって、サウジの天然ガス開発に外資導入という新たな段階 (第 3 段階) を迎えたのである。

3. サウジ・ガス・イニシアティブとガス・ラウンドの概要

3. 1 サウジ・ガス・イニシアティブ

前節で明らかになったのは、財政赤字に悩んできたサウジ政府が、天然ガス需要の増大に対して非随伴ガスの供給量を増大させるために、その生産能力増強のための投資を必要とした点である。

こうした観点から、アブドラ国王 (当時皇太子) は 1998 年 9 月にアメリカを訪問し、国際石油企業各社に天然ガス産業への投資を要請した。その後、それら企業は割り当てられた 3 つの開発地域ごとに開発計画書をサウジ政府に提出した。この開発計画は「サウジ・ガス・イニシアティブ」と呼ばれている。その後、2001 年 6 月には、サウジ政府によって選ばれた 8 社の国際石油企業とサウジ政府の間で初期契約 (preparatory agreement) が調印された。その調印では、国際石油会社の 8 社の首脳が参加し、サウジ側はサウド外相が契約書にサインをした¹²⁾。

以下において、サウジ・ガス・イニシアティブに含まれる 3 カ所のコア・ベンチャーについて説明しよう (表 1 参照)¹³⁾。

第 1 に、コア・ベンチャー 1 である。対象となっているのは世界最大のガワール油田の南側に位置する南ガワール地域であり、総投資額は 100 億ドルから 150 億ドルである。この事業の参加企業は、幹事企業のエクソン・モービル (35%、カッコ内の数字は出資比率、以下コア・ベンチャー 3 まで同様)、ロイヤル・ダッチ・シェル (25%)、BP (25%)、フィリップス (15%、現コノコフィリップス) である。このプロジェクトにはガス田の探査・開発やガスの輸送、海水淡水化計画などが含まれている。

第 2 に、サウジ西側の紅海沿岸のコア・ベンチャー 2 である。総投資額は 50 億ドルから 70 億ドルである。参加企業には、幹事企業のエクソン・モービル (60%)、マラソン (20%)、オキシデンタル (20%) が含まれる。このプロジェクトには、紅海におけるガス田探査、既存ガス田の開発などに加えて、探査の進行程度に応じて、追加の投資機会があった。

表1 サウジ・ガス・イニシアティブの概要

開発プロジェクト	開発地域	参加企業	出資比率	投資額(推定)	事業内容
1.コア・ベンチャー1	南ガワール地域	エクソン・モービル ロイヤル・ダッチ・シェル BP フィリップス(現コノコフィリップス)	35% 25% 25% 15%	100億 - 150億ドル	ガス田の探査・開発、ガスの輸送・発電・海水淡水化計画、2つの石油化学プラントなど
2.コア・ベンチャー2	紅海沿岸地域	エクソン・モービル マラソン オキシデンタル	60% 20% 20%	50億 - 70億ドル	紅海でのガス田探査、ミドヤン(Midyan)、バルガン(Bargan)ガス田の開発、探査の進行程度に応じて、西海岸での石油化学、電力、海水淡水化での追加の投資機会など
3.コア・ベンチャー3	シャイバ地域	ロイヤル・ダッチ・シェル コノコ(現コノコフィリップス) トタル・フィナ・エルフ(現トタル)	40% 30% 30%	50億 - 70億ドル	ルブ・アル・ハリ南部でのガス田探査、シャイバ(Shaybah)・キダン(Kidan)両ガス田開発、電力・水関連設備だけではなくジュベールでの石油化学プラントの建設など

出所：拙稿「サウジアラビアのエネルギー産業と国際経済関係」佐藤千景・島敏夫・中津孝司編『エネルギー国際経済』晃洋書房、2004年、p.50、*Middle East Economic Digest*, Jun.1,2001より著者作成

第3に、シャイバ(Shaybah)ガス田を中心としたコア・ベンチャー3であり、UAE(アラブ首長国連邦)の国境地帯までのルブ・アル・ハリ砂漠に位置している。このプロジェクトへの参加企業は、幹事企業のロイヤル・ダッチ・シェル(40%)、コノコ(30%、現コノコフィリップス)、トタル・フィナ・エルフ(30%、現トタル)で、総投資額は50億ドルから70億ドルである。この事業には南部のルブ・アル・ハリ砂漠地帯でのガス田探査、既存のガス田での開発が含まれ、これらで生産されたガスは、ハウィーヤ(Hawiyah)・ハラド(Haradh)両ガス処理プラントまで輸送される。

3. 2 サウジ・ガス・イニシアティブの決裂とその原因

サウジ・ガス・イニシアティブは初期契約が調印された後、最終的な合意に向けて交渉が行われたが、交渉は暗礁に乗り上げた。そして、2003年6月に、サウジ政府がコア・ベンチャー1に関して中断していた交渉の打ち切りを決定したことが明らかとなった。また、コア・ベンチャー2も破談していたことが明らかとなった¹⁴⁾。交渉が決裂した主な原因として、投資対象地域における利益率での意見の相違がある。参加予定の国際石油企業が想定していたのは年率15～18%であったのに対して、サウジ政府側の想定は8～12%であった¹⁵⁾。このような利益率の違いは、提示されたガス田の面積や課税問題だけでなく、このプロジェクトが天然ガス田開発に加えて、電力、海水淡水化などの公共事業とリンクしていた点と結び付いている。電気や水は、生産コストを大きく下回る価格で国民に供給されていたのである。

3. 3 コアベンチャー3での合意

2003年7月中旬、サウジ政府は、サウジ・ガス・イニシアティブでコア・ベンチャー3として、ロイヤル・ダッチ・シェル、トタルと交渉が続けられてきたルブ・アル・ハリ砂漠におけるガス田開発で合意に達したことを公表した¹⁶⁾。このため、ガス田開発で初めて外資が導入されることになった。ただ、サウジ・ガス・イニシアティブで想定されていた上流部門から下流部門までの開発ではなく、

ガスの上流部門の開発のみに限定する 20 億ドルの投資額と見込まれる合意であった¹⁷⁾。このプロジェクトの出資比率は、ロイヤル・ダッチ・シェルが 40%、トタルが 30%、サウジアラムコが 30%であった¹⁸⁾。

3. 4 ガス・ラウンド

サウジ政府は、ロイヤル・ダッチ・シェル、トタルなどとの交渉とは別に、2003 年 7 月にルブ・アル・ハリ砂漠の 3 つの地区を対象とした新たなガス・ラウンドも進めた。ロンドンで行なわれた説明会には約 40 の国際石油企業が招待された¹⁹⁾。

2004 年 1 月に予定されていた入札は、非随伴ガスの探査、開発などのために、ルブ・アル・ハリ砂漠における 3 つの地区を対象として行われるもので、失敗したサウジ・ガス・イニシアティブ後の新しい「ガス・ラウンド」である。3 つの地区は、当初サウジ・ガス・イニシアティブでコアベンチャー 1 として開発が指定されていた地域であり、A 地区、B 地区、C 地区と分割されている²⁰⁾。

その後、2004 年 1 月には国際入札²¹⁾が実施され、その結果、利権を獲得したのは A 地区ではロシアのルークオイル、B 地区では中国石油化工（シノペック）、C 地区では ENI（イタリア炭化水素公社）・スペインのレプソルのコンソーシアムである（表 2 参照）²²⁾。

なお、これらの天然ガス開発計画に関して以下の 3 点を補足しておきたい²³⁾。第 1 に、C 地区を担当する ENI とレプソル（スペイン）の出資比率は 50 : 30 である。第 2 に、3 つの全ての地区を担当する企業に与えられる探査、開発期間は 40 年間である。第 3 に、3 つの地区における企業は、サウジアラムコと 80 : 20 の比率で合弁会社²⁴⁾を創設する²⁵⁾。

表 2 ガス・ラウンドの概要

開発地域	参加企業	出資比率	合弁会社名
A 地区	ルークオイル	80%	ルークオイル・サウジアラビア
	サウジアラムコ	20%	
B 地区	中国石油化工（シノペック）	80%	シノサウジ・ガス
	サウジアラムコ	20%	
C 地区	ENI（イタリア炭化水素公社）	50%	エニレスパ・ガス
	レプソル	30%	
	サウジアラムコ	20%	

出所：Middle East Economic Digest, Jan.30-Feb.5, 2004, Arab News（電子版），Apr.29,2004 より著者作成

4. 外資導入の背景

この節では、前述したサウジにおける天然ガス産業の開発への外資導入の背景を考察しよう。その際、サウジ・ガス・イニシアティブとその後のガス・ラウンドではやや事情が異なるので、別々に説明することにしよう。

4. 1 サウジ・ガス・イニシアティブの背景

(a) 分岐点としての1998年

そもそもなぜ、サウジの天然ガス産業が外資に開放されたのであろうか。それを検討する際に、前述したようにサウジの天然ガス開発が第3段階を迎えていることを想起しておこう。この新しい段階は、前述したように、1998年にアブドラ国王(当時皇太子)が訪米をして、国際石油メジャーにエネルギー資源開発への投資を要請したことに始まる。それゆえ、この1998年という時期がサウジにとってどのような時期に位置付けられるのかについて確認しておきたい。

図1、図2、表3を御覧頂きたい。図1はドバイ原油で見た原油の推移である。これによれば、ドバイ原油²⁶⁾の価格は1990年代半ばには1バレル10ドル代後半であったが、1998年には12ドルにまで低下した。その後、2000年には26ドルを超え、2001年以降は20ドル代以上に上昇した。つまり、1998年という時期は原油価格の暴落の時期に相当する。図2はサウジの1人当たりGDP(国内総生産)の推移である。これによれば、1998年に原油価格が暴落したため、原油・天然ガス部門がGDPの40%程度を占めるこの国では、7400ドル余りと前年に比べて約14%も減少した。また、表3はサウジの財政収支の推移を示しているが、1998年には前年比約3倍となる484億SR(約129億ドル)の財政赤字を抱えることになった。サウジの財政赤字は1983年以来2002年まで2000年を除いて続いていたが、1998年には、前述した原油価格の落ち込みによる大幅な財政赤字に直面したのである。

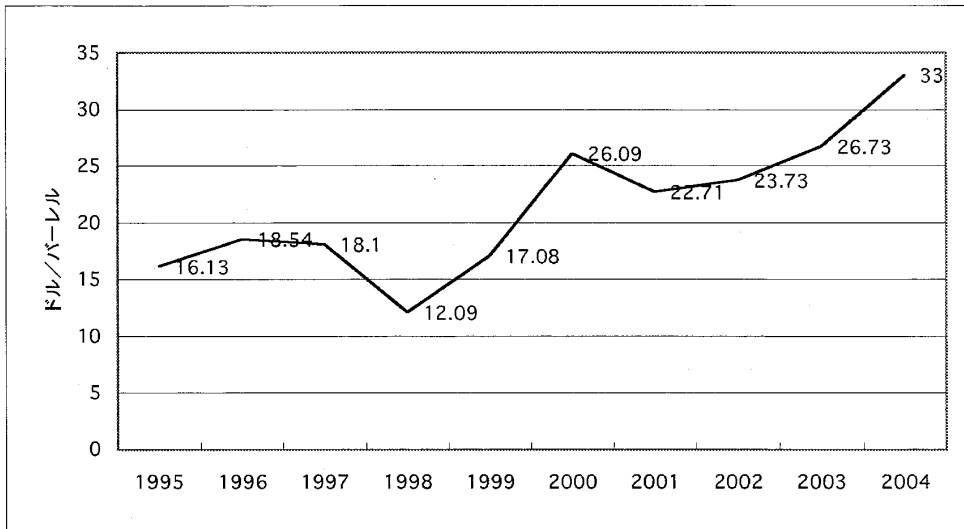
(b) 人口問題とその影響²⁷⁾

このような経済の落ち込みの中で、アブドラ国王はアメリカを訪問し、自国のエネルギー資源への投資を要請したのである。ただ、ここで注意しなければならないのは、1人当たりGDPが急減したり、財政赤字が急増したことは外資導入を加速させたが、本質的な問題ではないという点である。この国が抱えている根本的な問題は人口爆発にある。したがって、サウジ・ガス・イニシアティブに外資導入が計画された背景として、人口問題に言及しておかなければならない。

サウジ・ガス・イニシアティブのサウジ側の交渉者の責任者であったサウド外相は「サウジアラビアは、経済インフラ建設を促進し、成長率を高め、国民のための雇用や訓練機会を新規創造し、サウジ資本を用いる魅力的な機会を作り出すために、大きなかつ早急な投資を引きつけることを求めている」²⁸⁾と述べた。この発言から分かることは、天然ガス開発をインフラ問題や失業問題とリンクさせていることにある²⁹⁾。

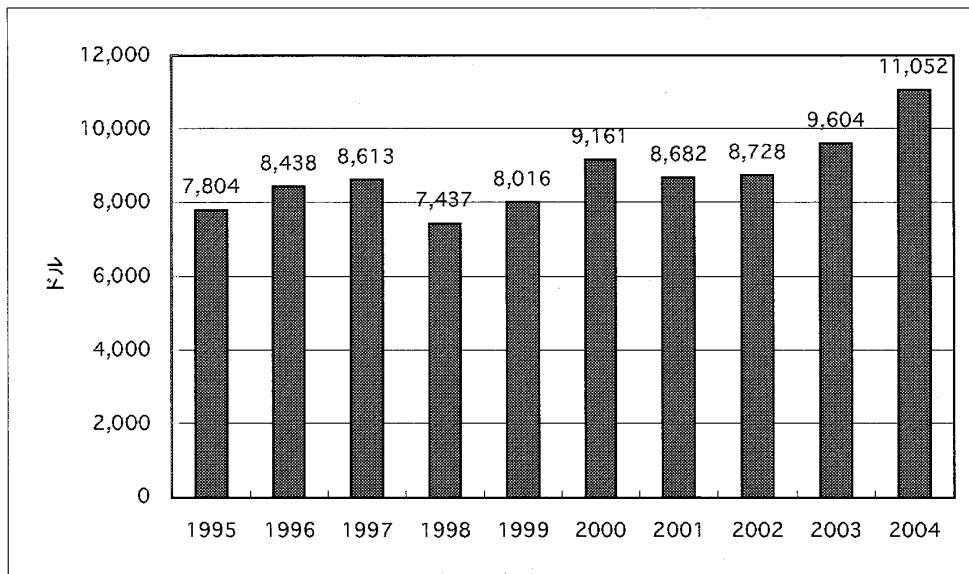
IMF(国際通貨基金)によれば、サウジの人口は1975年に725万人であったが、2000年には2000万人を突破した³⁰⁾。また、1975年から2002年までのこの国の年平均人口成長率は4.4%で、ここ30年ほどの間に世界で最も人口が急増した国の一つである。さらに、2002年から今後2015年までの年平均人口成長率も2.5%と見込まれている³¹⁾。このような高い人口成長率は、若年層の急増をもたらし、人口の半分程度が14歳以下の超弱齢化社会を生み出した。

この人口爆発や超弱齢化社会の誕生は、次の2つの問題につながっていった³²⁾。



(出所：1995 - 2003 年は IMF, *IFS Yearbook 2004*,
2004 年は 2004 年 12 月 29 日付け 『日本経済新聞』)

図 1 石油価格 (ドバイ、ドル/バーレル)



(出所：Saudi American Bank,
The Saudi Economy at Mid Year 2005, 2005)

図 2 サウジの一人当たり GDP

第 1 に、人口増大は水道、電力等のインフラ不足につながった。都市人口比率は 1965 年の 39% から 2002 年には 87% と急上昇した³³⁾。こうした都市化は核家族化の進行とも相まって、インフラに対する需要増を引き起こした³⁴⁾。今後、インフラ整備のために、2001 年からの 15 年間で 1000 億ドル程度の投資が必要であると見込まれている³⁵⁾。

第 2 に、これまで雇用機会のほとんどを創出してきた政府部門が直面している財政赤字のために、

十分な機能を果たせなくなっている。失業率が2003年で25%³⁶⁾とされ、雇用問題の解決が、サウジ政府の大きな課題となっているのが現状である³⁷⁾。このような状況の下で、政府は「サウジ人化」政策を推進して、労働者の自国民化政策を実施してきた。

では、こうした人口問題に起因する問題は、天然ガス産業とどのように関連しているのだろうか。

まず、サウジ・ガス・イニシアティブの3つのコア・ベンチャーの全てにおいて、単なる上流のガス田開発に限定されず、石油化学工業化以外にも、電力・海水淡水化関連のインフラ開

発も求められていた点を考慮する必要がある。この点に関して、2002年のサウジにおける天然ガスの国内需要別配分比率で、電力が38%と最も高く、海水淡水化が17%となっていたことを挙げておこう³⁸⁾。この数字は、天然ガスが原料としていかに公益事業で需要されているかを表している。

次に、天然ガス開発と雇用問題との関連である。前述したサウド外相の発言でも明らかのように、政府はサウジ・ガス・イニシアティブの参加予定企業が、発電、海水淡水化、石油化学プラントなどへ投資を行ない、そしてまた、雇用の受け皿として機能することを期待していた³⁹⁾。ガス産業における雇用吸収力の数字として公表されているものは、直接的には3万5000人の雇用、そして間接的な雇用も含めた合計で15万人である⁴⁰⁾。

(c) 経済自由化とWTO加盟

これまで、サウジ・ガス・イニシアティブにおいて外資導入が計画された背景について検討してきたが、ここではそれ以外の要因として、WTO（世界貿易機関）への加盟を挙げておきたい。

サウジは貿易自由化のメリットを享受するために、1993年に当時のGATT（関税および貿易に関する一般協定）に加盟申請をした。ただ、その後の交渉は進展せず、ようやく1999年ごろになって再び交渉は進み始め、2000年には日本との間での2国間交渉で合意した。その後、EU（欧州連合）との間でのそれでも合意に達し、そして2005年にアメリカとの間でも合意に達した。その結果、サウジは2005年11月のWTO一般理事会で149番目のWTOメンバーとして承認された⁴¹⁾。GCC（湾岸協力会議）6ヶ国では最後の加盟国であった。

このWTO加盟までの道のりにおいて、1999年あたりから加盟交渉が活発化してきたのは、1998年のアブドラ国王（当時皇太子）の訪米による投資要請が関係していると考えられる。人口増による経済改革への必要性が叫ばれる中、貿易や投資の自由化への道のりの中で天然ガス上流部門などがその開放対象となった。そして、この自由化に向けた動きは2000年の「新外国投資法」の制定へと結びつき、また、2001年には投資業務の窓口の一本化のために「総合投資院（Saudi Arabian General

表3 サウジの財政収支（億SR）

1996	△190
1997	△158
1998	△484
1999	△340
2000	227
2001	△250
2002	△210
2003	450
2004	980

(出所：(1) Riyadh Bank, *Saudi Economic Review* 4th Q, 2002,
 (2) *The Saudi Economy: 1999 Performance, 2000 Forecast*, Feb. 2000,
 (3) *Saudi Arabia's 2004 Budget, 2003 Performance*, Dec. 2003
 (4) *The Saudi Economy 2004 Performance, 2005 Forecast*, Feb. 2005
 (2)-(4)は全て Saudi American Bank)

Investment Authority : SAGIA)」が設立された。この「新外国投資法」では、外資の出資比率の制限枠をなくして100%の外国資本参加が認められた。この点に関しては、サウジ・ガス・イニシアティブで3つのコア・ベンチャーの全てのプロジェクトが100%外資によって占められていたことを想起しておこう。

4. 2 ガス・ラウンドの背景

ガス・ラウンドはサウジ・ガス・イニシアティブの失敗を受けて企画されたプロジェクトである。それに関するプレゼンテーションは2003年7月に行われ、その後、2004年1月に入札が実施され、権益獲得企業が決定された。その経緯からすると、2003年という時期が何らかの意味を持っているように思われる。それゆえ、以下でまず2003年にサウジやその周辺国で何があったのかを時系列的に把握しておこう。

- 1月：コア・ベンチャー2の交渉決裂
- 3月：イラク戦争爆发
- 4月：イラクのフセイン政権崩壊
- 5月：リヤドのコンパウンドにて連続爆弾テロ発生
- 6月：コア・ベンチャー1の交渉決裂
- 7月（11日）：コノコフィリップスがカタールガス3で開発協定に調印
- 7月（16日）：コア・ベンチャー3の交渉成立
- 7月（22日）：ガス・ラウンドのプレゼンテーション実施
- 11月：コア・ベンチャー3の正式調印

これらの時系列的な動きを検討する前に、最初に、前述したサウジ・ガス・イニシアティブでの外資導入の背景との関連について言及しておこう。指摘できるのは、サウジ・ガス・イニシアティブの背景として指摘された1人当たりGDPの落ち込みや財政赤字とは無関係である点である。前掲の図2、表3から分かるように、2003年という時期は、1人当たりGDPで9600ドルとそれまでの7、8年間では最も高く、また財政収支は前年の赤字から転じて、2000年を除いた1983年以降の20年間で初めて財政黒字に転じた年である。これらのマクロ経済指標の改善は原油価格の高騰が原因である（前掲図1参照）とはいえ、このような経済の上向いている時期であることに注意しておこう。ただ、人口問題との関連では1998年と状況は全く変わっていないことも指摘しておこう。

さて、このような状況認識を踏まえて、さきほどの2003年の時系列的出来事を考察していくと、次の4点が指摘できよう。

第1に、サウジ・ガス・イニシアティブの失敗である。1月のコア・ベンチャー2、6月のコア・ベンチャー1の交渉決裂、そして当初の計画規模を縮小したガス上流部門への外資導入に限定した形でのコア・ベンチャー3での合意成立（7月）などは、前述した主に経済性を原因とした上流部門から下流部門の一括投資によるプロジェクトの再考をサウジ政府に促した。このことは、こうした一括投資の形態が、外資導入の障害になるという政府の認識にも結びついていった。この点は、次のガス・

ラウンドでの外資誘致のスタイルがガス上流部門のみの投資に限定されるということを考慮すれば、納得がいく。また、このような投資誘致スタイルの変更は、人口爆発という時限爆弾を抱え、またガス需要が急増していく中で、メジャーによって拒否された天然ガス開発計画規模を縮小してでも、外資を導入したいという政府の意図を示している。

第2に、対米関係の悪化である。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロはサウジとアメリカとの関係に悪影響を及ぼし、それはサウジ・ガス・イニシアティブの2つのコア・ベンチャーでのアメリカ石油企業エクソン・モービルの交渉にも大きな影を落とした。このようなアメリカ企業の離脱は、サウジ国内の反米感情の高まりとともに、政府にとってガス開発における非アメリカ企業の価値を高めることとなった。こうした政府の認識は、7月22日から24日にかけてロンドンで実施されたガスラウンドのプレゼンテーションに招待された約40の石油会社の国籍にも出ており、アメリカのみならず、ヨーロッパ、中国、インド、日本、マレーシアなどの石油会社の代表が会議に出席した⁴²⁾。そして、この政府の意図は翌2004年1月に実施された入札で権益を獲得した企業の国籍⁴³⁾によって強化された。

第3に、リヤドで起こったテロの影響である。この5月のテロは翌日にアメリカのパウエル国務長官(当時)がサウジを訪問予定であったため、イラク戦争に対する反米感情をもとにしたイスラーム過激派の犯行と見られた⁴⁴⁾。こうした過激派の動きは、失業率が高い国内での無職の若年者と結び付けば、テロの温床となる危惧があり、また、それはサウド王家への反発につながる可能性もあった。そして、一方で、失業問題を解決するには、雇用吸収力を増大させる必要があった。ここに、雇用問題解決としてサウジ・ガス・イニシアティブを見ていた政府の姿勢が見えてくる。だが、それは失敗し、その代わりになるガス開発計画を外資導入のもとでぜひとも実現する必要性に迫られていた。

第4に、サウジの周辺国での状況変化である。3月下旬に勃発したイラク戦争によって、フセイン政権は4月に崩壊した。こうしたイラク情勢の変化は、原油確認埋蔵量世界第3位のイラクにおけるエネルギー資源開発への外資の参入の期待を高めることとなった。また、7月11日にはアメリカの石油会社であるコノコフィリップスがサウジの隣国カタールで「カタールガス3」のLNG開発協定に調印した。コノコフィリップスは、サウジ・ガス・イニシアティブにおいてはコア・ベンチャー3に当初参加予定であったが、このカタールのLNG開発で合意に達する見込みが出来た段階で、コア・ベンチャー3から離脱した⁴⁵⁾。その5日後の7月16日、コノコフィリップスの代わりにサウジアラムコが参加したうえで、ロイヤル・ダッチ・シェル、トタルによる合意に達し、11月に正式に調印された。このような、イラクでの外資導入への期待の高まりや、コノコフィリップスの行動は、サウジの天然ガスが相対的に魅力的でなくなることを意味している。それゆえ、こうした認識は、規模を縮小してでもガス開発に外資導入を実現したいという焦りに結びついた。

5. 結論

2004 年末現在のサウジの天然ガスの確認埋蔵量は 238 兆 4000 億立方フィートに達し、世界全体の 3.8% を占めており、ロシア、イラン、カタールに次ぐ世界第 4 位である⁴⁶⁾。石油だけでなく、天然ガスの確認埋蔵量においても世界有数のサウジは、1975 年に「マスター・ガス・システム」の建設を行い、このシステムを通じて、それまで無駄に浪費されていた随伴ガスを有効利用しようとした。このことがサウジにおける天然ガス産業の開発の第 1 段階とすれば、第 2 段階は 1984 年からの非随伴ガスの開発開始であり、アラムコはこれ以降、非随伴ガスの開発を重点的に行って来ている。今日、天然ガス確認埋蔵量の中で非随伴ガスの占める比率は 40% 程度⁴⁷⁾にまで高まったと見られている。そして、1998 年にはサウジ・ガス・イニシアティブによる外資導入への要請という第 3 段階を迎えた。その後、2003 年にはロイヤル・ダッチ・シェル、トタル、そしてまた 2004 年にはガス・ラウンドにて、3 つの地区での 4 企業による外資導入が決まった。

サウジ・ガス・イニシアティブによって、政府が外資の導入政策に転じた背景には、第 1 に、財政赤字による資本不足、第 2 に、インフラ不足、第 3 に、雇用吸収力の不足などが挙げられる。これらの 3 つの不足の改善手段として外資導入に期待が寄せられた。さらに、第 4 に、WTO 加盟への期待も挙げられる。また、これらの 4 つのうち、第 2・第 3 の要因は人口爆発と関連している。

次に、ガスラウンドにおける外資導入の背景には次の 4 点が挙げられる。第 1 に、増大するガス需要に直面する中でのサウジ・ガス・イニシアティブの失敗に基づいた規模を縮小した形での代替プロジェクトの必要性、第 2 に、国民の反米感情を踏まえたアメリカ離れ、第 3 に、テロ対策としての雇用吸収力への期待と王室に対する反発の回避、第 4 に、イラク、カタールなどサウジ周辺国での情勢変化に伴うサウジ産天然ガスの相対的魅力的低下である。ただ、サウジ・ガス・イニシアティブの背景で挙げた人口問題に起因するインフラ不足、雇用吸収力の不足や WTO 加盟への期待といった点は、依然としてガスラウンドの根底に流れていたことには留意すべきであろう。

注

- 1) 本稿は、2005 年 10 月に実施された日本国際経済学会第 64 回全国大会で、筆者が発表した内容に加筆修正したものであることを付記したい。また、学会報告の際、討論者の大阪商業大学中津孝司先生およびフロアーから貴重なコメントを頂戴した。記して感謝申し上げる。
- 2) 第 2 節執筆の際に、その説明の多くは、(1) 拙稿「サウジアラビアのケース」梅津和郎・岡田睦美・永安幸正編『グローバル・ビジネス—地球化時代の企業経営』嵯峨野書院、1993 年、所収、(2) 拙稿「サウジアラビアの天然ガス開発とガス・イニシアティブの背景」『関西国際大学研究紀要』第 4 号、2003 年 3 月、(3) 拙稿「エネルギー資源開発への外資導入と人口爆発—サウジアラビアの天然ガス産業のケース」『Int'lecowk』932 号、国際経済労働研究所、2003 年 8 月、(4) 拙稿「サウジアラビアのエネルギー産業と国際経済関係」佐藤千景・島 敏夫・中津孝司編『エネルギー国際経済』晃洋書房、2004 年 3 月の 4 本の拙論文を参考にした。
- 3) *OPEC Annual Statistical Bulletin* 2003

- 4) Alan Richards, John Waterbury, "A Political Economy of the Middle East: State, Class and Economic Development." The American Univ. in Cairo Press, 1990, p.66.
- 5) *Middle East Economic Digest*, Aug.16, 2002 によれば, マスター・ガス・システムとは 1975 年にサウジアラムコにサウジ政府が企画, 建設, 操業するように要請したもので, サウジアラビアの工業化のエネルギー源として国内で広範囲にガスを集め, 加工するシステムのことを言う。
- 6) ピエール・シャマス「GCC における石油・ガス開発の現状: サウディアラビア」, 『中東協力センターニュース』, 2001 年 10 月/11 月月号: <http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/11-01/11-01-03.pdf>, pp.25-26
- 7) *OPEC Annual Statistical Bulletin*, 2003
- 8) ピエール・シャマス, 前掲書 p.27
- 9) 1988 年にアメリカ系メジャーのテキサコ(現シェブロン)との間で合弁企業のスター・エンタープライズを創設したのを始め, サウジアラムコは 1990 年代前半に, 韓国, フィリピン, ギリシャの石油下流部門に進出した。Paul Stevens, ed., "Strategic Positioning in the Oil Industry: Trends and Options," The Emirates Center for Strategic Studies and Research, 1998, p.49
- 10) *BP Statistical Review of World Energy*, Jun.2005 によれば, サウジの国民一人当たりのガス需要量はアメリカ, ロシアなどと並び, 世界最大規模である。
- 11) 政府は, 財政赤字が続く中, 天然ガス田の開発により生産したガスを国内消費向けにすることで, それまで国内でエネルギー源として供給されてきた原油を解放し, それを輸出に回すことによって外貨収入を増やす政策を採った。このように, 天然ガスの供給を国内向けに限定することによって, それは国内の各産業でのエネルギー源として使用されている。
- 12) Arab NEWS (電子版), Jun.4, 2001 :
[http://www.arabnews.com/SArticle.asp?ID=2420&sct=Gas&.](http://www.arabnews.com/SArticle.asp?ID=2420&sct=Gas&)
- 13) 以下の 3 つのコアベンチャーに関する記述は, *Middle East Economic Digest*, Jun.1, 2001., *Middle East Economic Digest*, Feb.15, 2002., *Arab NEWS*(電子版), Jun.4, 2001:[http://www.arabnews.com/SArticle.asp?ID=2420&sct=Gas&.](http://www.arabnews.com/SArticle.asp?ID=2420&sct=Gas&), 拙稿「サウジアラビアの天然ガス開発とガス・イニシアティブの背景」『関西国際大学研究紀要』第 4 号, 2003 年 3 月を参考にした。
- 14) 2003 年 6 月 7 日付け『日本経済新聞』朝刊。
- 15) *Arab News* (電子版), Sep.10, 2002 :
<http://www.arabnews.com/SArticle.asp?ID=18495&sct=Gas%20initiative>
- 16) 2003 年 7 月 18 日付け『日本経済新聞』朝刊。
- 17) *Arab News* (電子版), Jul.17, 2003 :
<http://www.arabnews.com?page=1§ion=0&article=28976&d=17&m=7&y=2003>
- 18) 2003 年 7 月 18 日付け『日本経済新聞』朝刊。また, それによれば, サウジ・ガス・イニシアティブではコア・ベンチャー 3 に参加予定であったコノコ(現コノコフィリップス)分の 30%の出

資比率は、サウジアラムコが引き継いだ。

- 19) *Middle East Economic Digest*, Jul.25, 2003
- 20) *Middle East Economic Digest*, Jul.25, 2003
- 21) *Middle East Economic Digest*, Jan5 - Feb.5, 2004 によれば、応札企業は次の通りである。
A 地区はルークオイル, シェブロンテキサコ, 中国石油, 中国石油化工集团公司である。B 地区は中国石油化工集团公司, シェブロンテキサコ, 中国石油である。C 地区は ENI・レプソル, シェブロンテキサコ, 中国石油, 中国石油化工集团公司である。
- 22) *Middle East Economic Digest*, Jan. 5 - Feb.5, 2004
- 23) 以下の補足に関する記述は, *Middle East Economic Digest*, Jan5-Feb.5, 2004を参考にした。
- 24) 合弁会社の社名は, A 地区は「ルークオイル・サウジアラビア」, B 地区は「シノサウジ・ガス」, C 地区は「エニレスパ・ガス」である (表2 参照)。
- 25) サウジアラムコがパートナーとして加わった理由として, 以下の3点が挙げられる。第1に, 技術的な側面でのアドバイザー, 第2に, ガスの aggregator, 第3に, マスター・ガス・システムのオペレーターとしての役割である。Abd Allah Al - Saif, *Kingdom's Gas Development: Saudi Aramco's Role*, May.22,2004,p.8 :
<http://www.saudiaramco.com/sa/webServer/general/SaudiAramcoRoleInJVs.pdf>
- 26) サウジの原油の多くは主にアジア向けで, 長期的な契約に基づく供給によって行われている。その際の輸出価格はドバイ原油とオマーン原油の平均価格に割増金や割引きをしながら設定されている。
- 27) この「人口問題とその影響」の箇所は, 特に記述がない限り, 拙稿「サウジアラビアの天然ガス開発とガス・イニシアティブの背景」『関西国際大学研究紀要』第4号, 2003年3月を参考にした。
- 28) *Gulf NEWS* (電子版), Aug.23, 2002 :
<http://www.gulfnews.com/Articles/News.asp?ArticleID=61347>。
- 29) 石油化学工業化の原料として天然ガス産業を開発するという視点も重要であるので補足しておきたい。その理由として以下の3点が挙げられる。第1に, サウジ政府は, 比較優位がある原油を原料とした石油化学工業化を重視している。実際, ジュベール, ヤンブーの2大都市において, それを推進している。第2に, 原油を精製して生産されるナフサを用いて生産される石油化学生産物よりも, ガスを原料として用いて生産される石油化学生産物の方が価格が1/4以下となる (2005年7月19日付け『日本経済新聞』朝刊) ため, 価格競争力の点でガスを原料とする方が有利である。第3に, 天然ガス産業の開発の発端に関係している。マスター・ガス・システムを通じて輸送された随伴ガスは, 石油化学工業化のエネルギー源として用いられた。このような3つの点から, 石油化学工業化と天然ガス産業の開発との関係を考察することは重要である。しかし, この節で焦点を当てる人口爆発との関連は, 直接的にはないと考えられる。このような理由から, 本稿では, 石油化学工業化と天然ガス産業の関係には, 特に言及しない。ただ, 石油化学工業化による生産物の輸出額の変化は, 分配国家において国民に分配するレントに影響を与えることが

あるので、この意味において、それらは直接的には関係がなくとも、間接的には関係があると考えられる。

30) IMF, *International Financial Statistics Yearbook 2002*

31) *Human Development Report 2004*

32) この人口急増による影響に関する説明には、次の資料を参考にした。1997年6月15日付け『日本経済新聞』朝刊、1996年6月28日付け『日本経済新聞』朝刊、1997年11月3日付け『日本経済新聞』朝刊、1998年5月23日付け『日本経済新聞』朝刊

33) *World Development Report 1987, Human Development Report 2004*

34) 電気、水道の料金が生産コストより相当低いことが需要増の一因である。電力や水道などの低い公共料金は、分配国家において、石油収入の国民への分配手段としての意味合いがある。

35) 2001年1月8日付『日本経済新聞』朝刊

36) 2004年6月30日付け『日本経済新聞』朝刊

37) 失業者、特に若年層の失業者の増大は、イスラーム原理主義の過激な思想と結びつけば、テロの温床となる可能性を持っている。

38) Al - Faith, Khalid, A. *The Saudi Gas Sector : Its Role and Growth Opportunities :*

http://www.saudiaramco.com/sa/webServer/Role_of_Gas_Sector_and_Growth_Opportunities_English.pdf, figure9. また、石油化学工業は22%であった。

39) 2001年5月16日付け『日本経済新聞』朝刊

40) Khalid A., Al - Faith, op.cit., p.9, *Middle East Economic Digest*, Mar.16, 2001によれば、サウジ政府は2000年から開始された第7次5カ年計画において、「サウジ人化」政策の一環として、5年間で81万7300人の雇用機会を創出することを目標とし、その内32万8700人が新規雇用分であるため、15万人の雇用はその半分程を占めることになる。また、残りの48万8600人の雇用創出は外国人労働者からサウジ人への代替策として作り出される事を目標としている。

41) 2005年11月12日付『日本経済新聞』朝刊

42) *Middle East Economic Digest*, Jul.25, 2003

43) 前掲表2によれば、A地区、B地区、C地区の3地区の権益獲得したのは、ロシア、中国、イタリア、スペインの企業である。これにコア・ベンチャー3の権益獲得をしたロイヤル・ダッチ・シェル、トタルを合わせれば、6企業のうち4社がヨーロッパ、1社が中国、1社がロシアである。つまり、アメリカ企業が1社も入っていない。

44) 2003年5月13日付『日本経済新聞』夕刊

45) *Middle East Economic Digest*, Sep.26 - Oct.2, 2003

46) *BP Statistical Review of World Energy*, Jun. 2005

47) Khalid A. Al - Faith, op.cit., p.6

参考文献

- 1) 石井彰・藤和彦『世界を動かす石油戦略』筑摩書房 2003年
- 2) 岩崎徹也『開発と石油の政治経済学—サウジアラビアと国際石油市場—』学文社 1989年
- 3) 河村朗「サウジアラビアのケース」梅津和郎・岡田睦美・永安幸正編『グローバル・ビジネス—地球化時代の企業経営』嵯峨野書院 1993年
- 4) 河村朗「サウジアラビアの天然ガス開発とガス・イニシアティブの背景」『関西国際大学研究紀要』第4号, 2003年3月
- 5) 河村朗「エネルギー資源開発への外資導入と人口爆発—サウジアラビアの天然ガス産業のケース」『Int'lecowk』932号, 国際経済労働研究所 2003年8月
- 6) 河村朗「サウジアラビアのエネルギー産業と国際経済関係」佐藤千景・島 敏夫・中津孝司編『エネルギー国際経済』晃洋書房 2004年3月
- 7) 河村朗「人口爆発と雇用問題—サウジ人化への課題」『関西国際大学研究紀要』第5号, 2004年3月
- 8) 河村朗「中東諸国における天然ガス産業の開発と外資—サウジアラビアとカタールの比較」『関西国際大学研究紀要』第6号, 2005年3月
- 9) 田中保春「サウディアラビア・カンントリーレポート—地殻変動と構造改革—」, 2004年7月10日:
http://www.jetro.go.jp/turkey/middleeast/special/riyadh_j_countr_report_2004_09.pdf
- 10) 富塚俊夫「サウディアラビアの直面する人口増加と若年層の就業問題」『中東協力センターニュース』, 1999年12月/2000年1月号:
<http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/11-03/11-03-01.pdf>
- 11) ピエール・シャマス「GCCにおける石油・ガス開発の現状: サウディアラビア」『中東協力センターニュース』, 2001年10月/11月: HYPERLINK <http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/11-01/11-01-03.pdf> <http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/11-01/11-01-03.pdf>
- 12) 藤和彦『石油神話: 時代は天然ガスへ』文藝春秋 2002年
- 13) 細井長『中東の経済開発戦略—新時代へ向かう湾岸諸国—』ミネルヴァ書房 2005年
- 14) 山浦重一「中東における天然ガス開発を巡る最近の動向」『国際エネルギー動向分析』, 1999年10月号
- 15) 脇祐三『中東—大変貌の序曲』日本経済新聞社 2002年

Abd Allah Al - Saif, *Kingdom's Gas Development : Saudi Aramco's Role*, May.22,2004 :
<http://www.saudiaramco.com/sa/webServer/general/SaudiAramcoRoleInJVs.pdf>

Cordesman, Anthony H., *Economic and Demographic Stability and Instability in the Gulf*,
Center for Strategic and International Studies, 2001 :

<http://www.csis.org/burke/gulf/economicdemographic.pdf>. Cordesman,
Anthony H., Arleigh A. Burke, Economic, Demographic, and Social Challenges, in

Cordesman, Anthony H., *Saudi Arabia Enters the 21st Century*, Center for Strategic and International Studies, 2002 :

http://www.csis.org/burke/saudi21/S21_05.pdf.

Economic and Social Commission for Western Asia, *Survey of Economic and Social Developments in the ESCWA Region 2000-2001, Part 2, Comparative Analysis of the Role of the Private Sector in ESCWA Member Countries with Egypt and Saudi Arabia as Case Studies*, United Nations, 2002

EIA, "Saudi Arabia Country Analysis Brief" Jan., 2005

<http://www.eia.doe.gov/emeu/cabs/saudi.pdf>

EIA, "Saudi Arabia Country Analysis Brief" Aug., 2005

<http://www.eia.doe.gov/emeu/cabs/saudi.pdf>

ESCWA, *Youth Employment in the ESCWA Region*, Paper

Presented to Youth Employment Summit, Sep.7-11, 2002

http://www.un.org/esa/socdev/poverty/youth_unescwa.pdf.

Al-Faith, Khalid, A. *The Saudi Gas Sector: Its Role and Growth Opportunities* :

http://www.saudiaramco.com/sa/webServer/Role_of_Gas_Sector_and_Growth_Opportunities_English.pdf

Fareed, Mohamedi, "Oil, Gas and the Future of Arab Gulf Countries," *Middle East Report*, Jul-Sep. 1997

Gawdat Bahgat, "Foreign Investment In Saudi Arabia's Energy Sector," *Middle East Economic Survey*, Aug. 23, 2004

Al-Naimi, H.E., Ali I.: *The Achievement and the Future of Saudi Arabian Natural Gas*, :

<http://www.us-saudi-business.org/alnaimi.htm>

Al-Naimi, H.E., Ali I., *Natural Gas and Economic Growth in the Kingdom*, :

[http://www.mopm.gov.sa/html/en/speeches_e.html\(e_speeches_yanbu170401.pdf](http://www.mopm.gov.sa/html/en/speeches_e.html(e_speeches_yanbu170401.pdf)

Paul Stevens, ed., *Strategic Positioning In the Oil Industry: Trends and Options*, The Emirates Center for Strategic Studies and Research, 1998

Robert Mabro, "Saudi Arabia's Natural Gas : A Glimpse at Complex Issues," *Oxford Energy Comment*, Oct., 2002

Saudi American Bank, *The Saudi Economy in 2002*, Saudi American Bank, 2002

http://www.samba.com.sa/investment/economywatch/pdf/Saudi_Economy_2002_English.pdf

Saudi American Bank, *Saudi Arabia's Employment Profile*, Saudi American Bank, 2002 :

<http://www.samba.com.sa/investment/economywatch/pdf/Employment%20Oct02.pdf>

Saudi American Bank, *The Saudi Economy: 2002 Performance, 2003 Forecast*, Saudi American

Bank, 2003 :

<http://www.samba.com.sa/investment/economywatch/pdf/Saudi%20Economy%20Feb%202003%20English.pdf>.

Saudi Embassy of US, "Mastering Saudi Arabia's Gas Resources," *SAUDI ARABIA*, Spring, 1998 :

http://www.saudiembassy.net/publications/magazine-spring-98/gas_resources.htm

Woodward, Peter N., *Oil and Labor in the Middle East: Saudi Arabia and the Oil Boom*, Praeger, 1988

Abstract

The aim of this paper is to make a research on the backgrounds of the two projects- Saudi Gas Initiative and Gas Round-which were planned and realized for development of the natural gas industry in Saudi Arabia. The important point is that we focus on the two years-1998, and 2003. The former is the year King(the former Prince) Abdullah expressed transformation to the policy for introduction of foreign capital, and the latter is the year new Gas Round was planned ,based on failure of the Saudi Gas Initiative. We will make clear the backgrounds of these projects by picking up these two years.